

松本清張記念館

◆館報◆

2016.12
第53号

帝国大学は、
あくまでも狭き門の、
最高学府の権威を
保持したかったのである



『小説東京帝国大学』
昭和44(1969)年12月 新潮社

「小説東京帝国大学(原題:『小説東京大学』)」は「サンデー毎日」
昭和40(1965)年6月27日号～、昭和41(1966)年10月23日号に掲載された
入手しやすい本:ちくま文庫(上下)

目次

- 開館18周年記念講演 保阪正康講演会…………… 2
- 平成28年度後期特別企画展「清張が描いた日本近代」…………… 4
- 20周年記念企画 あふれる想いを…………… 5
- 現代東アジア文学史の国際共同研究…………… 5
- 展示品紹介…………… 6
- 点描 作品の舞台を訪ねて…………… 6
- 清張オマージュ作品を教えてください！…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8

作品紹介

明治三十五年の秋、私立哲学館では卒業試験が行われた。閲覧していた文部省の視学官は、学生の回答の一つに目を留める。

「帝王の弑殺を是認する学説を公然と教えている」と視学官は解したのだ。

ことは宮内省をも震撼させる大事件に発展、「国体」に不都合な点を含んだ学説を教えたとして、哲学館に認めていた中等教員無試験免許の特権を文部省は取り消す。苛烈な処分は私学と自由な学問への不当な弾圧だとして、新聞各社や他の私立大学も論陣を張るに至る。

最初の火種となった答案の主・工藤雄三のもとを、ある日、三人の帝国大学学生が訪れる。彼らは、事件ははじめから仕組まれていたのではないかと疑っていた。

帝大生たちは事件の背後に、哲学館学長・井上円了と東京帝国大学分科大学長・井上哲次郎の学説上の対立、さらに政府内外の勢力争いの存在まで読み解いていた。そして、帝国大学に国家の幹材たる官吏を養成する唯一の機関であることを期待した山県有朋の意図が働いているとも言おう。工藤は彼らの話を聞きながら、政府高官と繋がりを持ち、隠田の行者」と称される飯野吉三郎の暗闘に思い至る。

哲学館事件ののち、東大七博士事件、南北朝正閏問題、そして大逆事件と続く言論弾圧事件を、工藤は遠く九州から眺めていた。四半世紀の時を経て、慚愧の念に堪えかねた工藤はようやく告白の手紙を綴りはじめた。哲学館事件の発端にはたしかに魔手があったのだ。日露戦争を翌々年に控えたあの時期、山県の本意は何だったのか。

哲学館事件を皮切りに、実際の事件に材を取り、明治期の日本を描いた清張らしさの光る骨太の歴史小説。

(学芸員 小野芳美)

松本清張記念館開館18周年記念講演

平成28年8月6日(土)

午後3時

「近現代と清張史観」

男女共同参画センタームーブ

参加者約三〇〇名

講師 保阪正康 (ノンフィクション作家)



はじめに三つの「構え」

私は昭和十四年生まれで現在76歳です。昭和史をずっと調べてきて感じるのは、そこに日本の歴史そのものが様々な形で集約されているということ。これらをきちんと語り継ぐのがその時代を生きた者の役目だと思ひ、この歳になっても仕事を続けております。松本清張先生の作品、特に近現代史の書物から、私はたくさんのお話を教えられました。

歴史や人間と向き合うとき、私は三つの「構え」が必要だと考えます。その一つ目は「事実と真実」ということです。そして二つ目は「時代と歴史」です。歴史の流れの中で、今はどのような意味づけがされるかということ。それから三つ目は「公と私」これは「国家と個人」と言い換えることもできます。歴史だけに限らず、私たちが何かと向き合う際には、このような尺度が必要だと思ひます。私は松本先生の書物に向

き合うとき、この三つの構えを、ごく自然に持っていることに気がきました。

事実を調べ、真実を見る

まず事実とは、小学生の絵日記を思い出すと簡単に理解できます。何月何日、朝は何時に起きて神社でラジオ体操をして、そこに友達と誰々が来ていたとか、家に帰ってご飯を食べた後、ちよつと勉強をしてセミとりをしたとか書きますね。この小学生の日記は、事実をずっと累積していったものです。私たちにとって事実とは、きわめて基本的なものであり、どのようなものごとを考えると、視点の土台にあるものです。

しかし、それは真実とは異なります。では真実とは何でしょうか。永井荷風の「断腸亭日乗」という日記には、よく「今日は特記すべきことなし」と書いてあります。つまり彼にとつてその日は昨日と同じであり、日常生活がそのままくり返されたということ。その日の真実というものは、彼のその表現の中にあるわけです。

私たちは、事実というものをまずきちんと把握する必要がありますが、事実をいくら並べても真実は出てきません。真実は真実として見る目を持たなければならぬのです。そのためには、人それぞれに備わった感性や教育で受けた知識などの他にも、勘がいいとか勘が働くということが必要になります。松本先生が近現代史に向き合った姿勢をみれば、先生がものごとの本質をつかむ能力に優れた人だったことが

わかります。

終戦の際、ポツダム宣言の中に「戦争の責任者を裁く」という一項がありました。これに対し日本の政府や軍事指導者たちは、関係資料を全部燃やして隠蔽することで責任を逃れようとした。戦後七十年あまり経ちましたが、その間にコソコソと資料を集め直して分析し、事実や本質として真実は何かということを探求した上で、日本の近現代史は再び作られたのだと言えます。

その典型が松本先生の作業の中にも凝縮している。私たちは先生の仕事に対して畏敬の念を持つわけです。先生は「日本の黒い霧」や「昭和史発掘」を書くにあたり、徹底的に資料を集め、それを分析することで真実を見つけていきました。もちろん、先生が見たその真実がすべて当たっているとは思いません。その時代で集められた資料の限界の中で、真実はこれだと先生は導き出したのですから、後に他の資料が出てくれば、その真実に手直しが必要になってくるのも当然です。しかしそれは先生のせいではなく、最大限の努力をしても資料そのものが集まらないという、日本社会のその部分に病根があるわけです。

松本先生は「昭和史発掘」で集めた膨大な資料を、後に「二・二六事件の資料集」として出した。それを読むと先生が言わんとしていた明確なテーマが浮かんできます。例えば、個人々人としてはそれなりの善意や資質を持っていた青年将校たちが、大きな歴史の渦の中で巧みに利用されていくという構図が描かれています。狡猾な軍事指導者たちの政治的な振舞いの中心に、青年将校の情念を巧みに汲み取っていくことで、真実をきちんと描き出したのです。そして「日本の黒い霧」でも、各種の資料を収集した上で、この国の占領が解けた頃の、権力が収斂していき暗躍する様を描きました。これが先生の近現代史の特徴だと思ひます。やはり、事実

と真実というものをきちんと組み立てているのです。

つまり松本先生の本と向き合ったときに、事実と真実という目で読むことで、「真実」というのは、このような事実を列挙することによってわかるのか」と感じ取ることができ、本当の意味での読者だと思ひます。

ともすれば事実を簡単に捏造し、そのうえで真実を誘導するという、歴史修正主義的な手法もあります。これは単に歴史の問題に留まらず、社会の病理学的な問題になります。歴史を歴史としてきちんと見て学び、そして教訓を次の世代へつないでいくことが、私たちの役目だと思ひます。

歴史の中で問われている「今」

私たちはいまこうやって生きていますが、五十年・百年経って、歴史の中で「今」がどういう風になるかわかりません。しかしよく観察眼を持つていけば、たぶん将来こんな風になるんだらうなと考えることは可能です。

いま私たちはこの社会に、政治の劣化や政治家の質の低下といった様々な問題を抱えていると思ひます。しかしその中には、私たちはほとんど意識していませんが、将来の時代から審判を受けているような設問もあります。

具体的に言うとうと、まず、ファシズムはデモクラシーの弟だということです。つまりファシズムというものは、いつの時代もデモクラシーの後を影のようについて来るのです。そして、デモクラシーが疲弊して機能しなくなってきたときに、後ろからずつとついて来ていたファシズムが合法的に出てきます。これはヒトラーの例などを考えればよく理解できると思ひます。

次に、狭いナショナリズムは社会正義や社会的平等を装って出てくるということ。ナショナリズムというものは、いきなり「俺たちの国が一番立派だ」と言うのではなく、初め

はきちんと社会的な理想を訴えながら出てきます。近代の日本を振り返れば、それが隠れ蓑だとわかります。例えば二二六事件を起こした青年将校の決起書をよく読むと、確かにその「正義」には理解できる部分があります。これだけ社会が疲弊していたのなら、彼らが怒るのも無理はないと。しかし、彼らが社会正義の側に立って訴えた狭いナショナリズムには、かなり危険な要素が含まれていることを見逃してはいけません。

そしてこれが一番重要なことだと思います。それは戦間期の思想というものが、いま日本に出てくるかどうか、歴史上試されているということなんです。第一次世界大戦が終わってから第二次世界大戦が始まるまでの約二十年間にも、世界各地で「戦争で失ったものは戦争で取り返す」という戦間期の思想が出てきました。これは二十世紀の多くの戦争に共通した思想とも言えます。例えば「恐露病」という言葉があるように、日本は日露戦争で勝利して以降ずっと、ロシア・ソ連を仮想敵国にして怯えています。そして第二次世界大戦終結の直前でソ連は日本に対し宣戦布告をしましたが、その時スターリンには、日露戦争で失ったものを全部取り返してやるという思いがあったようです。つまり彼は、その戦間期の思想を四十年間も持っていたということなんです。

そう考えると、私たちの国は終戦からこれまでの間ずっと、戦間期の思想を持たないという世界記録を作ってきたと言えます。これが私たちの国の文化や伝統の本質だと私は思います。日本がもし軍を持つとするならば、まずはそういった戦間期の思想ではないのだという、きちんとした総括が必要になります。それを一切抜きにしてしまえば、日本は世界に疑念を与えないことになるのです。

松本先生の書いた昭和史を読むと、こういったことがすべて背景に浮かび上がってきます。



先生が多忙な中でも熱心に資料を集め、都合の悪い資料があつても逃げずに、真実の中に位置付けていくというところに、私は敬意を表します。

明治四十二年生まれの松本先生は、同世代の他の作家とはちよつと違って、軍隊に対してある意味での「公平感」を持っていたようです。軍隊では学歴など関係なく、兵隊の位が上の者は下の者に徹底的に制裁を加えます。いわば日本の軍隊は、社会の憂さ晴らしの空間になつていたわけです。こうした軍隊での妙な団結心や平等感というものを、内心ふつと意識したと先生は書いています。これは私たちが軍隊を考へるとき、ひとつの尺度になります。様々な清張作品の中に軍隊論が散りばめられていると思いますが、未だに誰も「きちん」と松本清張の「軍隊論」としてまとめられていません。やはり、日本の庶民が持っているこういった感情

も語り継がねばなりません。そして最近、天皇ご自身が生前退位について語られました。これも歴史的な積み重ねの中で分析するとよくわかるはずなんです。やはり松本先生は天皇論についてもまとめて書いてはいませんが、このようなテーマを解いていく方程式のようなものは、先生の昭和史の中に示唆されていると思います。

清張の教え

私は学生の頃に松本先生の「球形の荒野」という本を読んで、日本にこんな小説を書ける人がいるのかと驚愕したのを覚えています。その後、昭和四十五年三島由紀夫が自衛隊員に「共に死のう」と呼びかけ割腹した事件がありました。そのとき編集者になつていた私は、昭和の初めにも同じように死のうと叫んで事件を起こしたグループがいたと思ひ当たりました。この「死のう団事件」について資料を収集して書いたのが、私が初めて出した本になりました。

出版社の伝で、松本先生がその本の推薦文を書いてくれましたが、その中で「保阪は記録者としてよく調べた」という旨の評を頂きました。なぜ先生は私のことを「記録者」と言ったのか、私には当初よくわかりませんでした。

しかしその後、松本先生の本をずっと読み込んだりしていくうちに、あつたとき先生は「お前は事実を集めて書いたらう、しかしそれは真実か？ 真実は書いてないだろう」と言いたかつたのでは、と感ずるようになりました。

例えば「死のう団事件」の本で、まだ若かつた私は「特高に弾圧されたとかいう安易な書き方をしてしまったのですが、松本先生にしてみればそれは真実ではないのだと思います。集団の中である種のファシズム的な状況が醸成されていくときに、庶民個々人の中には本能的に忌避の感情が起り、死という自分を抹殺する

方法をとる者が出てくるのだ、つまりその絶望こそが真実なのだ、松本先生なら言つたのではないのでしょうか。

確かに、私にとつて膨大な資料を集めて分析することは非常におもしろく感じます。しかしそれに溺れて単なる資料の整理係になつてしまつては、何の意味もないのだということ、松本先生から教えられた気がします。

おわりに

これまで私がお話ししたようなことすべてを、松本先生は資料を使つて問題提起し、かつ自己完結するかたちで示しました。そこが既存の学者の歴史家や、小さなデータを元にすぐフィクション化する作家たちとは違つてるところです。

松本先生は資料に語らせようとしつつも、先生の思想や哲学、そして人生観が語るんだという姿勢を崩しませんでした。そしてどんな時でも、人間と人間がやることすべてに興味があつたのだと思います。

膨大な清張作品にも「自分の再認識」という共通の視点があると思います。それは松本清張そのひとの再確認であると同時に、自らが時代に生きたという再確認でもあります。つまり歴史の中でどう見られるか、真実をどのようにとらえたかの再確認です。その普遍性を発し続けていくことが私なりの希望です。

松本清張は天や歴史から何かを命じられた作家だと、私は思っています。そう思う以外に、あの膨大な作品の一つひとつに盛り込まれたテーマや訴えというものを理解しようがありません。しかし皆さんと確認したかつたのは、先生が歴史上にめつたに現れない時代の証言者であり、次の世代への強烈なメッセージであつたということです。読んで向き合うことで、その良き継承者たらんとするのが、私たちの差し当たりの責務だと感じます。

清張が描いた日本の近代

—— 豊穡なる小説群

開催期間

平成29年1月21日(土)～平成29年3月31日(金)
午前9時30分～午後6時(入館は午後5時30分まで)

会場

松本清張記念館地階「企画展示室」

入場料

常設展示観覧料に含む(一般500円・中高生300円・小学生200円)

1 近代日本の骨格を創った人々

清張は明治の元勳のうち、伊藤博文、山県有朋、西園寺公望は何度も題材に取り上げました。



「象徴の設計」
初単行本

2 独立独歩の人々

清張が多く著した評伝的作品から、思想家を取り上げた作品をご紹介します。



「岡倉天心 その内なる敵」
初単行本



「火の虚舟」初単行本

3 横断的な作品群

清張は同じ題材・テーマを、アプローチを変えて掘り下げながら執筆しています。



「小説東京帝国大学」
初単行本



「神々の乱心」初単行本

4 作家と史家の融合

清張が「史眼」を重んじ「資料に語らせる」手法を確立したことをご紹介します。



「両像・森鷗外」初単行本

清張はデビュー作「西郷札」以来、明治期・大正期を舞台にした作品を数多く執筆しました。長編・短編を問わず、また、ノンフィクション的なもの、フィクション的なもの、人物の生涯を描いた評伝的なものなど、そのスタイルは一概ではありません。

しかし、こうした近代を舞台にした作品群を通して、清張は私たちに考えるきっかけを与えてくれます。

資料を重んじ、史料を読み解き、事実の空白を磨き上げた「史眼」で補う。この手法で清張は「作家と史家の融合」と賞賛される独自の境地を切り拓きました。

今回の企画展では、近代を舞台にした小説群から、清張がどのように日本の近代を描いたか、どのように「史眼」を確立していったのかを浮き彫りにします。



あふれる想いを… 1

松本清張記念館は、平成30年に開館20周年を迎えます。そこで、20周年記念企画として、今号から、当館にゆかりの方にお話をお伺いして、平成30年度まで掲載していきます。

記念すべき第一号は、開館にあたって再現家屋の展示内容や展示パネル、図録の編集に携わられた、文藝春秋の田中光子さんです。

「作家の城」を再現するまで

平成元年4月、「文藝春秋」編集部員だった入社2年目の私は、松本清張先生の担当を命じられました。大先輩である藤井康栄さんの指導の下、資料を集め、取材旅行のお伴をし、浜田山のご自宅へ通ってお原稿をいただき、ワープロで清書したものを何度となく校正してもらい、どうにか八篇の連作短編を掲載することができました。

平成4年8月に清張先生が逝去されると、藤井さんと『松本清張全集第三期』の準備に入りました。著作・著書目録を完璧なものにする作業のかたわら、週刊誌2誌に連載中だった小説のゲラや資料、書庫からあふれんばかりの膨大な蔵書が散逸せぬよう、ご家族の許しを得てカメラマンと書齋・書庫に入り、本棚の位置をスケッチしたり記録写真を撮ったりしたのです。

やがて、小倉に松本清張記念館を作りたい、との北九州市の熱心なオファーを松本家が快諾され、40年以上清張担当をつとめた藤井さんが中心となって構想が具体化。私も全集の準備をしながら、藤井さんのお手伝いをするようになりました。

「ただ原稿や著書を並べるだけでは、松本清張という作家の真の姿が伝わらない。煙草の灰が落ちるのもかまわず、編集者の取材報告を聞き、先の構想を語った応接間。独り執筆に打ち込んだ書齋や書庫。いわば『作家の城』をそっくり再現し、見てもらえれば」

藤井さんのこの言葉から、松本清張記念館のあるべき姿が定まったと記憶しています。

書庫の写真をもとに、司書の先輩と共に3万冊にも及ぶ蔵書目録を



田中 光子
文藝春秋文藝出版局
第一文藝部副部長

作成する気の速くなるような作業が始まりました。書齋も勝手に整理してはならない。遺作となった連載小説のゲラや積み上げられた本、各社の担当者が持ち込んだ資料の紙袋も、そのまま展示されるのです。

また、私自身も途中から展示物作成の会議に出席するようになり、巨大年表や展示パネル、情報ライブラリの原稿依頼や校正、図録の編集も担当しました。

やがて建物が完成。書齋、書庫、応接間が壁の色から絨毯の焼け焦げまでリアルに作られ、先生が使っておられた机や椅子、本棚や蔵書がご自宅から寄贈されました。展示ケースやパネルの設置のため、スタッフ一同、開館直前の記念館で作業を行いました。

応接間に入ると、懐かしさのあまり涙が出そうになりました。芝生の庭を背に、いつも先生が座られる椅子。緊張しながら自分が座っていた玄関側のソファ。左手のドアの向こうから、階段を下りてくる先生の足音が聞こえてきそうでした。

書齋の本棚には執筆の参考にとお送りした本にフセンが貼ってある。先生の魂は今も、ここにおられるのではないかとすら思えました。

開館以来、何度も記念館に来ているのに、渡り廊下を抜けて書齋のそばまでくると、そのたびに、身が引き締まります。自分は先生に恥ずかしくない仕事ができているか。自分の頭で考え、疑わしいことは調べ抜いているだろうか、と。私ばかりではありません。松本清張を敬愛する作家も、先輩編集者も、記念館に来ると清張さんのパワーをわけてもらえる、と口にしつづけます。

清張記念館は再来年、開館20周年を迎えます。その間、学芸員の皆さんは30以上の企画展を実施され、毎年研究誌を発刊されてきました。いつ行っても、変わらぬ静謐な書齋と、作品を読むうえでの新しい発見がある——これからもそんな記念館でありつづけてほしいと願っています。

「現代東アジア文学史の国際共同研究」第4回シンポジウム 報告



東京大学・山上会館にて、シンポジウム参加メンバー

科学研究費助成による国際共同研究(代表:東京大学大学院・藤井省三教授)の第4回シンポジウムが、2016年7月28日(木)～8月1日(月)、東京大学・山上会館で行われ、当館学芸員の柳原暁子が発表しました。

2013年4月から始まった共同研究は、今年度で終了です。研究の成果は、今後冊子としてまとめられる予定です。

4年間の国際共同研究参加は、終わってみるとあっという間でした。東アジア文学史における清張文学について多くの情報を得ることができ、また考察する機会を与えていただいたことに、大変感謝しています。海外の研究者と出会えたことも大きな財産となりました。(柳原暁子)



柳原暁子学芸員発表風景

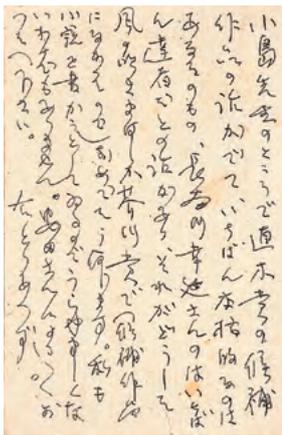
和田芳恵からの葉書

前回紹介した「大佛次郎からの手紙」は、「西郷札」が「週刊朝日」の懸賞に入選、掲載された際のものだった。

今回紹介するのは、「或る『小倉日記』伝」が芥川賞を受賞した時に、和田芳恵から届いた葉書である。

小島先生のところで直木賞の候補作品の話がでて、いちばん本格的なのはあなたのもの、長谷川幸延さんのはいちばん達者だとの話があり、それがどうした風の吹きまはしか芥川賞で（候補作品になかったので）おめでたう存じます。私も小説を書かうとしてゐるのでうらやましくないわけでもありません。安田さんによろしくおつたへ下さい。右とりあへず。

（小島先生）とは、直木賞選考委員の小島政次郎だろう。（長谷川幸延）は「老残」が、清張とともに候補作として挙がっていた。結局、立野信之「叛乱」が直木賞に選ばれ、清張の「或る『小倉日記』伝」が芥川賞に回されて受賞という結果となった。（安田さん）は清張の朝日新聞社同僚の安田満か。当時清張は、東京本社に出張した安田に、「三田文学」の合評会に代理出席してもらっている（※1）。



和田芳恵は、作家であると同時に樋口一葉研究もしていた。もと編集者なので、文壇で交際があった小島政次郎から話を聞いていたらしい。前評判の良かった「或る『小倉日記』伝」が、直木賞を受賞するのならば、（それがどうした風の吹きまはしか芥川賞）なのだから、和田もびつくりしたことだろう。おそらく芥川賞、直木賞史上に残る椿事の二つに違いない。

これら全ての発端は、「或る『小倉日記』伝」が掲載された「三田文学」において、木々高太郎が、清張や和田を起用したことにある。何せ彼らは慶應義塾大学に縁もゆかりも無いのだ。清張は、「三田文学」に掲載された和田の「暗い血」を読んで、「こんなうまい小説を書く人が中央に居る以上、自分などはとうていダメだとすっかり自信を喪失したものだ」※2と書いている。以来、和田と清張は懇意にしていた。「正太夫の舌」（一九七二）を書くにあたっては、和田と一緒に取材をしている。また、一時松本邸の玄関先に秋田犬が飼われたのは、大きな秋田犬を飼っていた和田からの影響によるといえる。文壇にあまり付き合ひのなかった清張に、和田のような友人がいたことには、何となく喜びを感じる。そのことも含め、受賞そのものが木々の采配による「三田文学」の奇跡、とでも呼びたい気がする。

（※1）和田芳恵「夜中の電話」（昭和文学全集 集1「月報一九六六年」角川書店）参照。左
（※2）にも清張側からの記述がある。
松本清張「運不運」わが小説（「松本清張全集」65巻一九九六年 文芸春秋）
（学芸員 柳原 暁子）

「或る『小倉日記』伝」① 浪の音と鈴の音

「或る『小倉日記』伝」は、松本清張が昭和二十七年に「三田文学」に発表し、第28回芥川賞を受賞した作品である。

生まれながらに身体が不自由でありながら、頭明晰であったという田上耕作。生涯をかけて小倉時代の森鷗外について調べた耕作の生き様を、モデルにして描いた小説である。

博労町は小倉の北端で、すぐ前は海になっていた。海は玄界灘につづく響灘だ。家には始終荒浪の音がしていた。耕作はこの浪の響をききながら育った。

（文藝春秋「松本清張全集35」或る『小倉日記』伝より）
現在の小倉に「博労町」の地名は残っていない。昭和十年頃の地図を見ると、現在の小倉駅の南側（現京町三丁目付近）に博労町はある。実際に、多分この辺りであったらうところに行ってみた。ちょうど、小倉駅南側の再開発ビルの工事現場付近。浪の音はしない。聞えてくるのは、電車や車が通る音、駅のホームから流れてくる音、工事の音。

それも当然の話で、海は遠くへいってしまっただのだ。大正時代の小倉市街地の地図によると、博労町の線路の北側はすぐに海である。しかし、昭和十年の地図では、北側にはかなり埋め立て地が広がっている。清張がこの作品を発表した昭和二十七年当時では、埋め立てはかなり進んでいて、この地に立っても浪の音は聞えず、記憶の中の浪の音を書いたのではないだろうか。そして、その記憶の音にも一つ「でんびんや」もあったのかもしれない。耕作の父の家作の老



人が、手に柄のついた大きな鈴をもち、歩きながらそれを鳴らしていたという。耕作の両親はこの老人の一家を「でんびんや」と呼んでいた。

じいさんは朝早く家を出て行って、耕作がまだ床の中にいる頃、表を通った。ちりんちりんという手の鈴の音は次第次第に町を遠ざかり、いつまでも幽かな余韻を耳に残して消えた。耕作は枕にじっと顔をうずめて、耳をすませて、この鈴の音がかぼそく消えるまでを聞くのが好きだった。それは子供心に甘い哀感を誘った。（中略）秋の夜など響灘の波音に混って、表を通る鈴の音をきくのは、淡い感傷であった。

（文藝春秋「松本清張全集35」或る『小倉日記』伝より）
浪の音に混じる鈴の音、想像するだけでなんともやさしく郷愁を誘う。

そして耕作は「でんびんや」と、中学生になつて鷗外の小説の中で出会う。

会社の徽章の付いた帽を被って、辻々に立って、手紙を市内へ届けることでも、途中で買って邪魔になるものを自宅へ持って帰らせる事でも、何でも受け合おうのが伝便である。手紙や品物と引換に、会社の印の据わっている紙切をくれる。存外間違いはないのである。小倉で伝便と云っているのが、この走使である。（ちくま文庫「遺言中／青年森鷗外全集2」「独身」より）

博労町、でんびんや、森鷗外、そして行方不明の「小倉日記」、すべてが繋がっていて、耕作の一生を彩ったものたちであり、それは幼い日に聞いたやさしい浪の音と鈴の音から始まったのではないだろうか。

今となっては聞くことの出来ないやさしい音の名残でもと思ったけれど、博労町だった町で見つけることは出来なかった。（楡垣 二美）

清張オマージュ作品を教えてください!



この前読んだ小説に清張が出てきたよ!



応募・お問い合わせ先

〒803-0813 北九州市小倉北区城内2-3
 松本清張記念館 オマージュ係
 TEL093-582-2761 FAX093-562-2303
 E-mail shi-seichou@city.kitakyushu.lg.jp
 ※当館の公式ウェブサイト、トップページから送信できます。

松本清張記念館は平成30年で開館20周年を迎えます。これを記念して当館では「清張オマージュ展」(仮)を開催する予定です。

松本清張や、清張作品への愛を、文章や絵、漫画などの作品で表現したものを、できるだけ多くご紹介したいと思っています。ご存知の方は、是非とも情報をお寄せください。

お待ちしております!!



著名人が、好きな作家に清張の名前を挙げていた!



清張の本が出てくる漫画があった!



オマージュ【仏語】

①尊敬。敬意。②賛辞。献辞 『広辞苑』より

友の会 活動報告

● 平成28年度年次総会・懇親会

8月6日(土) 参加者41名

●総会 北九州市男女共同参画センター・ムーブ 5階

開館記念講演会の後、平成28年度友の会年次総会を開催しました。前年度の事業報告及び決算、役員選任、新年度の事業計画及び予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。懇親会は、総会終了後に会場を小倉リーセントホテルに移して行いました。北橋市長をはじめ、講演会講師の保阪様、研究奨励事業山田審査委員長にもご参加いただき、和やかな懇親会となりました。



● 清張サロン

第1回 9月29日(木) 14:00~16:00 参加者25名

- テーマ 松本清張と村上春樹
— 戦後日本文学のモダン、ポストモダン
- 講師 柳原暁子(記念館・学芸員)

平成28年度の第1回清張サロンは、記念館の柳原学芸員を講師として、「現代東アジア文学史の国際共同研究」の報告と発表論文「松本清張と村上春樹 — 戦後日本文学のモダン、ポストモダン」をテーマに開催しました。国際共同研究ワークショップの様子などについての話があった後、論文の要旨について分かりやすく興味を引く説明がありました。

● 文学散歩「清張ゆかりの地・佐賀を訪ねて」

11月8日(火) 参加者45名

訪問先: 吉野ヶ里歴史公園、羊羹資料館、佐賀市歴史民俗館、松川屋、三重津海軍所跡・佐野常民記念館など

佐賀市周辺は、吉野ヶ里遺跡、清張が立ち寄った羊羹資料館、清張夫人の実家があった神埼、清張原作映画「張込み」のロケ隊が宿泊した松川屋など、清張にゆかりが深い土地です。

最初の訪問地、吉野ヶ里歴史公園は整備が進み、開設当初に訪れた方は当時と随分印象が違っていました。清張は邪馬台国九州説ですが、吉野ヶ里は邪馬台国のイメージに合わなかったようです。次に向かった羊羹資料館(小城市)では、村岡総本舗の村岡社長に清張先生とのエピソードを語っていただきました。佐賀市では大正時代を偲ばせる旧古賀銀行と江戸時代創業の旅館建築・松川屋などを見学しました。三重津海軍所跡(佐賀市)は、昨

年世界遺産に登録され、隣接する佐野常民記念館にインフォメーションコーナーがありました。今回も見所が多く、参加者の皆様から「楽しかった」「次回もぜひ参加したい」といった声をいただきました。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日~翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761

松本清張記念館

第18回

松本清張研究奨励事業
入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」は18回目を迎えました。選考委員会による厳正な審査の結果、次の2点の研究企画が入選しました。清張の政治思想を内在的に検討し史学史上に位置づける研究と、清張と考古学者・森浩一との交流や互いに及ぼしあった影響等を考察する研究で、共に成果が期待されます。

企画名 松本清張の政治思想
— 言論界、大学、歴史記述

入選者 倉科 岳志 (京都産業大学准教授)

企画名 松本清張と森浩一
— 一定説への挑戦と古代史ブームの牽引

入選者 深萱 真穂 (フリーライター)



倉科 岳志氏

深萱 真穂氏

講演に行ってきました

平成28年11月11日(金)午前10時から2時間、北九州市民カレッジ「北九州の文学～昭和と戦後を読み解く～第3回」が、生涯学習総合センターで行われ、当館の柳原学芸員が『松本清張の戦争と北九州』という演題で講演を行いました。

約40名が聴講し、文学好きの皆様が多く、活発な質疑応答の場面もありました。

第19回 松本清張研究
奨励事業募集

募集要項

対象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)

※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体可。

内容 入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成29年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧ください。なるか、記念館までお問い合わせください。



● **編集後記** ● 記念館周辺には、色鮮やかな落ち葉のじゅうたんが広がり、清張通りの街路樹もすっかり冬木立となってきました。

そろそろ今年一年を振り返る時期ですが、記念館は前へ前へと進んでいきます。4ページにも載せていますが、来年早々には後期特別企画展が開催されます。そして、再来年の開館20周年に向けての新しい企画として、今号から、開館同時に記念館に携わった方たちにお話をうかがっていきます。懐かしい話や今の想いを語っていただきたいと思っています。どうぞお楽しみに。

来年もどうぞよろしくお願いたします。新しい年が、皆さまにとって良い年でありますように。(K.H)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

